

令和7年度 千葉県における「まさば及びごまさば太平洋系群」に係る資源管理協定の取組の効果の検証結果（中間）

（1）千葉県におけるマサバ及びゴマサバの漁業実態

千葉県で漁獲されるマサバ及びゴマサバは両魚種とも太平洋系群として扱われており、大臣許可漁業を除く漁法としては主にまき網漁業、定置網漁業、たもすくい漁業により漁獲されている。

マサバ及びゴマサバは特定水産資源であり、両魚種の太平洋系群をまとめて「まさば及びごまさば太平洋系群」として、国による漁獲可能量（TAC）管理がなされている。本県は、国全体の漁獲量のおおむね 80 パーセント構成する上位の都道府県に該当せず、現行水準の漁獲量であれば資源に与える影響は少ないという考えから、国から本県への配分数量は示されていない。そのため、本県では、知事管理漁獲可能量を管理年度（7月から6月）ごとに「現行水準」としており、漁業者の自主的取組による漁獲努力量の制限を通じた管理を行っている。

（2）資源管理の目標及び目標達成のための具体的な取組

目標（資源管理基本方針に定める資源管理の目標）

1 目標管理基準値

- (1) まさば太平洋系群 482 千トン（最大持続生産量を達成する漁獲圧力の代替値として、加入量当たり親魚量が、漁獲圧力が0の場合の加入量当たり親魚量に対し、40パーセントとなるときの漁獲圧力を用いることで達成される資源水準の値）
- (2) ごまさば太平洋系群 167 千トン（最大持続生産量を達成するために必要な親魚量）

2 限界管理基準値

- (1) まさば太平洋系群 142 千トン（漁獲が無いと仮定した場合の親魚量の10パーセント）
- (2) ごまさば太平洋系群 54 千トン（最大持続生産量の60パーセントを達成するために必要な親魚量）

3 禁漁水準値

- (1) まさば太平洋系群 0 千トン
- (2) ごまさば太平洋系群 7 千トン（最大持続生産量の10パーセントが得られる親魚量）

該当する資源管理協定

「まさば及びごまさば太平洋系群」に係る資源管理協定（以下、協定という。）は、下表の8協定で、約17名がマサバ及びゴマサバを対象とするそれぞれの協定に参加しており、このうち本検証の対象となるのは、4協定となっている。

協定	備考	協定	備考	協定	備考	協定	備考
天羽		鋸南町保田・波左間		鋸南町勝山		岩井富浦	
西岬		東安房（本所）		東安房（和田）		鴨川市	

本検証の対象協定

自主的取組

漁業の種類	資源管理の取組	取組の内容	備考
定置漁業	休漁期間の設定	8月から12月のうち約2週間 9月から2月までの間の約2週間 8月から11月のうち約2週間 7月から11月のうち約1ヶ月	天羽 鋸南町保田・波左間 岩井富浦 鴨川
火光利用さば漁業、 敷網漁業	休漁日の設定	毎週金曜日	岩井富浦
	その他	・漁場を一部共有する他都県との協調 ・これまでに実施してきている自主的な資源管理措置()の実施 操業時間の制限、漁法の制限	
つり漁業	休漁日の設定	第1・第3土曜日	鴨川

協定に記載されている取組

(3) 資源管理の取組状況

本県は、国全体の漁獲量のおおむね80パーセント構成する上位の都道府県に該当せず、国から本県への配分数量は示されていないため、知事管理漁獲可能量は管理年度(1月から12月)ごとに「現行水準」として、上記の自主的取組による漁獲努力量の制限を通じた管理を行っている。上記の資源管理協定が締結されて以降、資源管理協議会により上記の取組内容は全て履行が確認されているため、漁獲努力量の制限が適切に行われていたと考えられる。

国の令和6年(2024年)度資源評価では、マサバ太平洋系群及びゴマサバ太平洋系群ともに近年は親魚量・資源量が低い水準となっている(図1、2)。また、マサバ太平洋系群では、資源量・親魚量は減少傾向にあり、親魚量は最大持続生産量(MSY)を実現する水準を下回り、漁獲圧は上回っているため、神戸プロットでは左上の赤色ゾーンとなっている(図3)。ゴマサバ太平洋系群では、資源量・親魚量は減少傾向にあり、親魚量は最大持続生産量(MSY)を実現する水準を下回り、漁獲圧は下回っているため、神戸プロットでは左下の黄色ゾーンとなっている(図4)。協定参加者による検証(以下、「自己点検」という。)では、漁獲量及びCPUE(単位努力量あたり漁獲量)が、3協定で減少、1協定で維持と判断されており、国の資源評価結果と一致する結果となった。また、魚価(単価)は3協定で維持、1協定で減少と判断されている。

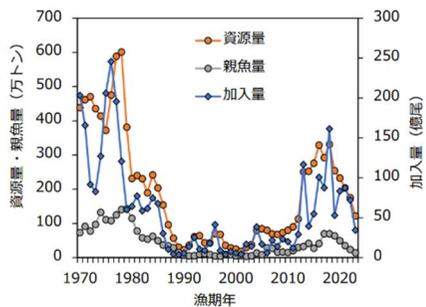


図1 マサバ太平洋系群の資源量・親魚量の推移
(水研機構 HP 令和6(2024)年度マサバ太平洋系群の資源評価)

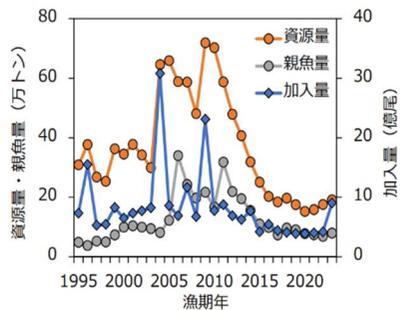


図2 ゴマサバ太平洋系群の資源量・親魚量の推移
(水研機構 HP 令和6(2024)年度ゴマサバ太平洋系群の資源評価)

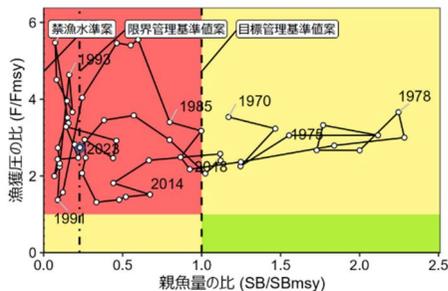


図3 マサバ太平洋系群の神戸プロット
(水研機構 HP 令和6(2024)年度マサバ太平洋系群の資源評価)

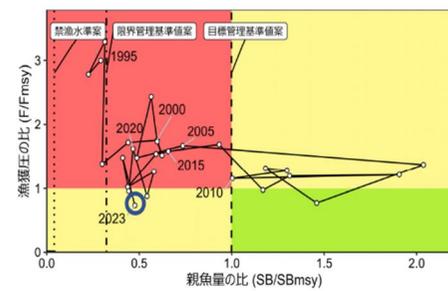


図4 ゴマサバ太平洋系群の神戸プロット
(水研機構 HP 令和6(2024)年度ゴマサバ太平洋系群の資源評価)

(4) 資源管理の効果を高めるための協定の改善・高度化の検討

漁業者による自主的取組により漁獲努力量による制限が適切に行われていることから、現在の取組内容は資源の保存及び管理に効果的なものであると考えられる。一方で、現在、親魚量はマサバ及びゴマサバ共に最大持続生産量(MSY)を実現する水準を下回っており、良好とは言えない資源状況となっている。また、自己点検においても漁獲量及びCPUEが減少していると判断された。そのため、今後も国の資源評価結果に基づいた漁獲可能量を遵守するため、現在の取組内容を継続して漁獲努力量による制限を適切に実施するとともに、国の資源評価結果と海況を始めとする海洋環境に注視し、状況に応じた対応を検討していくことが必要と考えられる。